

### 3.5 「<sup>そうねんぶけっせいきねんび</sup>壮年部結成記念日」

#### 1 枚目／<sup>こうふ おうごんぼしら そうねんぶ</sup>広布の“黄金柱”壮年部（5枚目の絵の裏に貼る）

壮年部の「壮」の字には、「<sup>つよ</sup>強い」「<sup>おお</sup>大きい」との<sup>いみ</sup>意味があります。それは、“<sup>いさま</sup>勇ましさ”の<sup>しょうちよう</sup>象徴です。

<sup>いっか</sup>一家の<sup>はしら</sup>柱、<sup>しゃかい</sup>社会の柱として<sup>かつやく</sup>活躍する壮年部の<sup>とも</sup>友に、<sup>いけだせんせい</sup>池田先生は「壮年部は広布の黄金柱である」との大きな<sup>きたい</sup>期待を<sup>よ</sup>寄せられています。

#### 2 枚目／「<sup>そうねんぶ</sup>壮年部」の<sup>けっせい</sup>結成への<sup>おも</sup>思い（1枚目の絵の裏に貼る）

<sup>いけだせんせい</sup>池田先生が<sup>そうかがつかいだい</sup>創価学会第3代<sup>だいかいちょう</sup>会長に<sup>しゅうにん</sup>就任されて6<sup>ねんめ</sup>年目の1966年、<sup>いけだせんせい</sup>池田先生は<sup>せっち</sup>壮年部の<sup>ほっぴよう</sup>設置を<sup>はっぴよう</sup>発表されました。

<sup>とうじ</sup>当時は、<sup>さいこうかんぶ</sup>最高幹部の<sup>じんじ</sup>人事、<sup>りじちよう</sup>理事長の<sup>こうたい</sup>交代、<sup>そうむせい</sup>総務制の設置など、<sup>ままたま</sup>学会の<sup>たいせい</sup>様々な<sup>しんしゅつぽつ</sup>体制が<sup>むか</sup>新出発を<sup>むか</sup>迎えている<sup>とき</sup>時でした。

池田先生は、<sup>おも</sup>壮年部結成への<sup>のち</sup>思いを<sup>つづ</sup>後にこう<sup>つづ</sup>綴られています。

「<sup>けんざい</sup>壮年部が<sup>ふじんぶ</sup>健在であってこそ、<sup>だんじよせいねんぶ</sup>婦人部も、<sup>あんしん</sup>男女青年部も、<sup>たたか</sup>安心して<sup>たたか</sup>戦える。

<sup>たいせつ</sup>大切な、<sup>たいせつ</sup>大切な<sup>がつかいかぞく</sup>学会家族を<sup>まも</sup>護り<sup>ぬ</sup>抜く<sup>おうごんぼしら</sup>黄金柱よ、<sup>いふうどうどう</sup>威風堂々たれ！——これが、<sup>みずか</sup>自ら<sup>しんしゅつぽつ</sup>壮年として<sup>しき</sup>指揮を<sup>と</sup>執られた<sup>まきぐち</sup>牧口、<sup>と</sup>戸田<sup>だりようせんせい</sup>両先生の<sup>ねが</sup>願ひであつたといつてよい。この<sup>こころ</sup>心<sup>じつげん</sup>を<sup>わたくし</sup>実現するため、<sup>わたくし</sup>私は<sup>わたくし</sup>壮年部をつくつたのだ」

3枚目／結成式 3月5日／「妙法の名将」たれ (2枚目の絵の裏に貼る)

1966年(昭和41年)3月5日、学会本部で行われた壮年部結成式の席上、その前途を祝して、池田先生が書き上げられたばかりの巻頭言が朗読されました。

そこでは、「妙法の名将」と題して、6つの指針が挙げられています。

第1に御本尊への絶対の確信。

第2に難事をも成し遂げゆく力。

第3に社会のすべてに通暁し、職場で勝利する世雄(立派な社会人)。

第4に後輩を育成していく熱意。

第5に人間性豊かな包容力ある指導者。

第6に旺盛な責任感と来るべき事態を予見し着実な手を打つ計画性――

池田先生は結成式に出席された翌日には、南米・北米指導に旅立たれ、移動の機中から見えるアマゾン川に、壮年部結成への想いを馳せられました。

「窓を覗くと、地平線は明るみ、眼下には雄大なアマゾンの大河が見えた。この大河の如く、世界広宣流布の悠久の流れを開いてみせる――そのための重大な“画竜点睛”こそ、壮年部の結成であったのだ」――と。

#### 4枚目／**壮年の力**（3枚目の絵の裏に貼る）

日蓮大聖人のご在世当時も、中心となって活躍したのは、壮年信徒でした。

青年のイメージが強い四條金吾も、竜の口の法難、主君への折伏など、果敢に戦いぬいたのは40代半ばからとされています。

また、富木常忍、大田乗明、曾谷教信などの門下も、今の壮年部に当たる世代の時に、必死に門下を励まし、大聖人をお守りしたのです。

池田先生は語られています。

「壮年たちが、今こそ立ち上がろうと、勇猛果敢に戦い、同志を励ましていったからこそ、大法難のなかでも確信の柱を得て、多くの人びとが、信仰を貫き通せたにちがいない。壮年がいれば、皆が安心する。壮年が立てば、皆が勇気を燃え上がらせる。壮年の存在は重い。その力はあまりにも大きい」

#### 5枚目／**青年の心意気で！**（4枚目の絵の裏に貼る）

池田先生は、壮年部に対し次のようにご指導して下さっています。

「今、日本の国では青年が少なくなってきている。「壮年部」即「青年部」——それぐらいの心意気で進むことだ。この点を先取りし、若々しい気概に燃える人は、勝っていける。団体も、国も、青年の心で勝利していける。」と。

また、「大事なのは「今」である。壮年が立ち上がるのだ。広布のため、同志のために、たとえ自分はどうなっても、「この私の姿を見てくれ！」という戦いを、青年の胸に残していくのである」ともスピーチして下さいました。

私たちも池田先生の弟子として、四者一体となって、青年の心意気で師匠にお応えして参りましょう。

**決意など**